

イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授
小田島 恒志

(第27回)

ロンドン点描

この季節になると思い出す情景がある。1989年の暮れ、まだネット社会になる前だったので、通信手段は郵便か電話であり、駅前の郵便局には足しげく通っていたのだが、この時期、いつもより窓口のキューイング(列)が長くなっていた。原因はクリスマスカードである。クリスチャンの人々だけでなく、「メリー・クリスマス」の代わりに「シーズズ・グリーティング」を出す人たちもいるので、当然、列が長くなる。日本の年賀状みたいなものだから、まあ、仕方がない。

窓口のおじさんと「How are you?」「Fine, thank you. And you?」と教科書通りのやり取りをするのはいつも通り。ところがこの日、次の人がこんな言い方をしていた。「How are you?」に対して、おじさんから「Fine」という返事が返ってきたところで、「You must be! (そりゃfineに決まってるだろう!）」と突っ込んだのだ。こんなにカードを出す人が並んでいて商売繁盛、あんたもウハウハだね!ということなのだろうが、横で聞いていて、なんだかほっこりしてしまった。教義問答のように機械的に発していた言葉にも、ちゃんと気持ちが込められているのだということに改めて認識したものだ。と同時に、散々待たされてイライラしていただろうに、こういう形でそ

のイライラを解消するのもイギリス人らしいな、と思った。

逆に、イギリス人らしくないな、と思った情景もある。郵便局での一件は、イギリス人はイライラしたりビリビリしたとしても、慌てたり騒ぎ立てたりすることなく穏やかに対応する、という認識にもつながるのだが、2005年、その認識と矛盾する情景に出くわした。ある日、テムズ川沿いのオープンテラスのファーストフード・カフェで昼食を取っていると、突然、隣席の若いカップルが立ち上がり、トレイを床に叩きつけたのだ。しかも、周りの目を気にすることもなく、教科書には出ていないような汚い言葉 (swearwords) を口にしながら。

一瞬何が起こったのか分からなかったが、よく見ると、彼らの足下から一羽の鳩がちょこちょこ小走りに出てきて、そのまま飛び去って行ったのだ。あ、なるほど。この頃、「鳥インフルエンザ」がついにヨーロッパでも発症した、という報道がなされたばかりだったのだ。それにしても、あの慌てよう…。常にポーカーフェイスで感情を表に出さないというイギリス人の印象が崩れた、いや、と言うより、ああ、イギリス人も慌てることのできるんだ、と思った瞬間だった。